

特別 映画上映会のお知らせ

入場無料
申込不要

ホール天井改修工事のため、1月から研修室で行っていた上映会が10月よりあすてらすホールに戻ってきます！ホールでの再開を記念して10月は2本立ての特別な上映会です！

10月19日（土） ※日時・内容は都合により変更になる場合があります

【14:00~】

ケアニン
~あなたでよかった~

(日本/鈴木浩介監督/2017年)

<あらすじ>

「なんとなく」介護福祉士となった主人公が、認知症の女性との関わりを通して、介護という仕事に向き合っていく。



©2017年 映画『ケアニン』製作委員会

【18:00~】

ラビング
~愛という名前のふたり~

(イギリス・アメリカ/
ジェフ・ニコルズ監督/2016年)

<あらすじ>

異人種間の結婚がタブーだった時代に結ばれたふたりの感動の実話。



©2016 Big Beach, LLC. All Rights Reserved.



新着図書



タイトル	内容
Going 妻あ Way: 昭和を生きた女たち 門野晴子/著 静岡新聞社 (2019.3)	昭和12年生まれ、著者が、老いと向き合いながら、嫁・母・祖母・女として生きた昭和という時代を総括。教育・女性問題など男社会の壁と闘った軌跡を綴る痛快エッセイ。
わたし、定時で帰ります。 朱野帰子/著 新潮社 (2019.1)	「定時で帰るは勇気のしるし」一定時退社をモットーにしている会社員・結衣が、長時間労働が当然とされている現代で、仕事とは何かを訴えかける。TVドラマ化された痛快お仕事小説！
樹木希林120の遺言 死ぬときぐらい好きにさせてよ 樹木希林/著 宝島社 (2019.1)	2018年9月15日に逝去された俳優・樹木希林さん。本書は、どんな困難も自分の“栄養”とし、あるがままを受け入れ生きてきた樹木さんが生前に遺したメッセージを厳選し、秘蔵写真や懐かしのドラマの貴重カットなどとともに掲載。
心理学でわかる女子の人間関係・感情辞典 石原加受子/著 朝日新聞出版社 (2019.4)	女性同士の人間関係で悩むのはなぜか。人間関係・感情のキーワードを心理学を通して読み解く。家族や職場、学校等での心が軽くなるコミュニケーションのヒントをまとめた一冊。
アラフォー・クライシス: 「不遇の世代」に迫る危機 NHK「クローズアップ現代+」取材班/著 新潮社 (2019.2)	現在35~44歳のアラフォー、いわゆる就職氷河期世代が危機に直面している。給料が上がらない、非正規でしか働き口がない、結婚する余裕もない。本書は、社会構造の変化、“男性働き主モデル”の崩壊により、努力しても報われない世代の生きづらさを浮き彫りにしている。
「支配しない男」になる 沼崎一郎/著 ぶんうま舎 (2019.5)	「支配する男」たちが作り上げてきた社会の中で「支配しない男」を目指す著者が、別姓結婚・育児・DV被害者支援を通して、性差別・性暴力に潜む本質をえぐり出す。
セクハラ・サバイバル: わたしは一人じゃなかった 佐藤かおり/著 三一書房 (2019.3)	「セクハラは労災です」。セクハラを受け、仕事も生活も打ち砕かれ、心身ともに追いつめられた一人の女性の闘いの記録であり、再生の物語である。
ディアガール: おんなのこたちへ エイミー・クラウス・ローゼンタール/著 主婦の友社 (2019.1)	今を生きるすべての女の子に贈る応援メッセージ。自信をなくしたとき、どうしたらいいかわからなくなったとき、元気と勇気もらえる一冊。シンプルな言葉は、子どもだけでなく、大人の女性にも優しく響いてくる。

◆ホームページでも新着やテーマ別の図書・DVD等を紹介しています◆

★★ 編集後記 ★★

初の試み、念願の読後感トークで、難しく感じた生命科学が身近なものに。読書の楽しみも、人や同種の本と繋がれば心に残ると実感、編集委員の絆も強まりました。フェスティバルのカフェでお会いしましょう。(白くま)

■ お問い合わせ先 ■

島根県立男女共同参画センター「あすてらす」情報ライブラリー
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 236-4
Tel 0854-84-5557 Fax 0854-84-5589
ホームページ <http://www.asuterasu-shimane.or.jp>

ライブラリーニュース

《あすてらす開館20周年記念号》

あすてらす情報Market

第9号
2019.9

●発行/公益財団法人しまね女性センター ●編集/情報Market編集委員

島根県立男女共同参画センター「あすてらす」は開館20周年！！11/16(土)の記念講演会に生物学者福岡伸一先生をお迎えします。そこで、編集委員みんなで先生の著書を読み、語り合いました。この初の試みを紙面拡大版にてご紹介します。当日、皆さまと一緒に、福岡先生のナマのお話を楽しめたら幸いです。

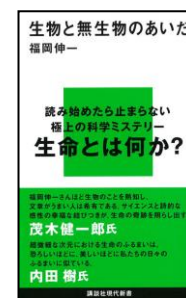
福岡伸一さん (生物学者)



【プロフィール】青山学院大学教授、米国ロックフェラー大学客員教授。サントリー学芸賞を受賞し、80万部を超えるベストセラーとなった『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書)、『動的平衡』(木楽舎)など、「生命とは何か」を動的平衡論から問い直した著作を数多く発表。また、大のフェルメール好きとしても知られ、全世界に散らばるフェルメールの全作品を巡った旅の紀行『フェルメール 光の王国』(木楽舎)を上梓し、最新のデジタル印刷技術によってリ・クリエイト(再創造)したフェルメール全作品を展示する「フェルメール・センター銀座」の監修および館長も務める。

生物と無生物のあいだ

福岡伸一 著 講談社現代新書 (2007/5) [460.4/フ]



第2章 アンサンブル・ヒーロー 容疑者Xが新犯人であるためには？

ウィルスは生物なのか、無生物なのか？ある病原体が病気の原因であることを立証するには、患者と健全な人のサンプルを用意し、顕微鏡で調べた際、患者のサンプルのみから微生物が発見されるところから始まる。

この病原体を探す過程の中で、発見されたのが、細菌とは異なる微小な自己複製能力を持つウィルスの存在である。

自己複製能力を持つウィルスは一見生物のように感じるが、筆者の考えは異なる。生物と無生物の境界はどういう点なのか。どのような違いがあるのか。読み進めなければ、解決が得られない構成になっていることに本書の面白さがあり、止まらなくなる。

(はっしー)

~異世代の男性二人が興味をそそられた一冊~

できそこないの男たち

福岡伸一 著 光文社新書 (2008/10) [467/フ]

太古から染色体XXつまりメスは脈々と自らの遺伝子を繋いできた。つまり、「生命の基本仕様はメス」で、世界はメスのみで維持されてきた。

著者は分子生物学者。「アダムの肋骨からイブが生まれた」のではなく、メスの繁栄の系譜をより強固な系統とするため、ひ弱なオスを誕生させ、メスを補完するための、表題のとおり哀しい存在であったとの解説は、平易で、優しく素人にも興味深い。然るに現在の状況はどこでどう間違えた？「原始女性は真に太陽であった。」と、平塚らいてうも100年も前に言っているのに。

講演では、遺伝子レベルのメスとオスの関係について、新鮮で優しく語られることと今から楽しみである。(ずらだ)



タイトルを見た際、現代の男性に対する問題提起をする内容の本だと思い、手に取った。

読み進めると、そうではなかった。平均寿命や、ガンの罹患率から男(オス)は生物学的に女(メス)よりも弱いことが紹介され、生物学的にみて、男たちはできそこないであると解説されている。

現在、なぜできそこないである男が社会を支配しているように見えるのか、筆者の推察は「メスが欲張りすぎたから？」。

生物学者の観点からの考えをわかりやすく、また読みやすく書かれた一冊。(たに)

動的平衡 ～生命はなぜそこに宿るのか～

福岡伸一 著 小学館新書 (2017/6) 【404/フ】

「生命は分子の淀み」



生きるためのエネルギー（ミトコンドリア）は母体からのみ受け継がれるといった興味深い話題で生命活動を分子レベルで紐解き、まるで話を聞いているように読める。

ミクロのレベルでは、分子は絶え間ない分解と再構成を繰り返し、その更新時に起きる「淀み」を越えながら、自分たちが一定の状態にあることに不思議な開放感を得る。

生命は、機械やシステムではなく、遺伝子だけに依存するのでもない。分子が私たちを通り抜ける流れの中で、まるで呼吸のように一定の状態を保つのなら、遺伝子組み換えや臓器移植は、生命の動的平衡に逆らうという理解も加わる。「種の保存」への意識が薄れ、「個の自由」を優先する社会に充てはめて考察する一説は未来への警鐘にも聞こえる。（白くま）



動的平衡2 ～生命は自由になれるのか～

福岡伸一 著 小学館新書 (2018/10) 【404/フ】

「なぜ多様性が必要か」



「分際」を知ることが長持ちの秘訣

本書は、私たちの身近な話題から深淵なテーマまで、いろいろな切り口でサイエンスを紹介している。どの項も面白く、筆者の幼少期のエピソードも、彼の人間性がにじんでいて親しみ易く好感が持てる。

生命の多様性の価値は、「バリエーションが多ければ、それだけ適応のチャンスが広がる」と、私自身も漠然と考えていたが、それはその一面でしかないという。生物の多様性は、動的平衡の強靭さ、回復力の大きさこそ支える根拠だと説かれている。

そして、全ての生物は、それぞれの「分際」を守っているが、ヒトだけが自らの分際を逸脱していると指摘。分際とは、多様な生命が住み分けている場所、時間、歴史が長い時間をかけて作り出したバランスのこと。「今、私たちが考えていかなければならないことは、生命観と環境観に対する認識を劇的に変えなければならない。」この言葉を真摯に受け止めたい。（まゆ）



動的平衡3

～チャンスは準備された心にもみ降り立つ～

福岡伸一 著 木楽舎 (2017/12) 【404/フ】



本書では、冒頭から著者の唱える動的平衡の生命理論が組織の運営にも応用できるというところから始まる。ほどなく本分の生命体の話に移るのだが、具体的な例示をもって語られるので、文系女子の私でも一気にあとがきにたどりついてしまう。

その途中、STAP 細胞騒動でメディアに取り上げられた研究者 小保方晴子さんの話題が登場する。当時、注目が、肝心の研究内容ではなく、理系女子である彼女の外見や趣向に集まったことは女性差別だと言いつける。このように、様々な分野において性差別に敏感な人がいることで社会は変わっていくのだ。

（チャムまる）

◎ 情報ライブラリー ご利用案内 ◎

- 利用時間 9:00～19:00 ※日曜日は図書整理のため18:00まで
- 休館日 月曜日、祝日、年末年始、図書整理日（月末）
- 貸出数（期間） 図書5冊（2週間）
ビデオ・DVD1本（1週間）
郵送での貸出、返却も行っていきます

■ パッケージ貸出のご案内 ■

利用目的に合わせて図書やDVDをまとめて貸し出すサービスを行っています。（～30冊程度）



- 利用者登録（団体）が必要
- 貸出期間は1ヶ月

男女共同参画の啓発や学習などの際にご活用ください！

福岡先生の著書をこれまでとは違う形で紹介できたらいいね！と編集委員たちがざっくばらんに読後感を語り合いました。

【メンバー紹介】



白くま はっしー まゆ ずらだ チャムまる たに

Part 1 「できそこないの男たち」 世界はメスで始まった？

生物学的な内容なのに文学的で魅力的。実際のお話は、より面白いだろうと感じた。

以前は男がいるから女が生まれると考えられていたが、都合の良い解釈という理解が面白い。

もともとメスしか存在しなかった世界に、環境に適応するためにオスが生み出されたいよ。生物学的にみても生命力は男が弱い。でも、今社会を仕切っているのが男なのはどうしてだろう。

男社会なのは、メスが欲張りすぎたからだってさ。本来、遺伝子を運ぶだけの役割だったオスに、巣作り・子育て・食料集めとか、役割を増やした結果、人間の場合、オス抜きでは生活できない状況ができあがったからじゃないかって。

性染色体Xだけが繋がると傷がついた際に修復が出来ないから、大きさも小さく弱いY性染色体が生まれた。Y染色体をもつ男はそういった意味でも、できそこないなのかも。

劣等感から威張っている部分もあるのかもよ。

孔雀のように色鮮やかな羽根で、オスの方が選ばれようとするよね。動物の傾向なのかな？

フウチョウも求愛でオスがダンスをする。蝉もオスが鳴いて求愛をするんだ。

人間はどうなんだろう？ 男性が女性に選ばれようと求愛してる？



Part 2 「動的平衡 1,2,3！」

そもそも動的平衡って？

破壊と生産が同時に行われていて、全体で平衡状態が保たれているとあった。

一定の年齢までは、破壊よりも生産のスピードが速いけど、その後、生産が抜かれて始まるのが老化現象だってさ。

じゃあ生まれたばかりの赤ちゃんは？

生産のスピードが早くてどんどん成長するんだろうね。動的平衡シリーズは、とても興味深くて子どもの頃や、子育て中に知っておきたかったわ。

動的平衡シリーズの副題に注目してみると、「生命は自由になれるのか」「チャンスは準備された心にもみ降り立つ」。これって福岡先生が一番言いたいことなのかもって感じたよ。

生物学の先生だけど男女共同参画に繋がるのかな？

著書の中でも随所に男女共同参画に関わるところがあるよ！

何事でも、あたりまえと思われていることに疑問を持つ先生で、そういった姿勢は「男女共同参画社会」の実現のためには大切な視点だね。

人気番組「チコちゃんに叱られる」とかマスメディアにも登場していて、話が面白いことでも有名。男女共同参画は意識の問題。生物学者という違った視点から、意識が変わるきっかけとなるような話をしてもらえることを期待してる！

福岡先生の話、もっと聞きたくなっただし、本人にお目にかかれるのも楽しみになった。